

認知症高齢者における社会的認知機能測定法の検討

— 日常会話能力を維持する被介護者の社会的認知 —

新田 慈子

第一章 序論

高齢化率上昇により、現役世代と要支援・要介護認定を受ける被介護者との接触増加が予測される。認知機能の構成要素である「社会的認知」を被介護者がどの程度維持するのかを把握することは、介護者と被介護者における良好な関係性の構築の上で重要である。

第二章 小児用誤信念課題の検討

「社会的認知」の評価法の一つである小児用誤信念課題が、高齢者にも適応可能か検討するため研究1を実施した。対象者は日常会話能力を維持する被介護者であったが、小児の発達課題にもかかわらず、正答できない被介護者が見受けられた。しかし、回答時に聞き間違いや不満が聞かれたことから、誤答になった原因が社会的認知機能の影響によるものとは判断できなかった。

第三章 高齢者用誤信念課題の開発

研究1の結果から、馴染み及び高齢者の自尊心に配慮した研究2「高齢者用誤信念課題」を作成、実施したところ、知能検査で評価される認知機能だけが正答率に影響するのではないという可能性が示唆された。また、軽度認知障害等の特徴である「取り繕い」と思われる反応と、介護者と知能を維持する被介護者の間に、課題に対して感じる難易度に違いがあることが抽出された。

第四章 社会的認知課題 予備調査

より詳細に社会的認知の状態を把握することを目指し、研究3「社会的認知課題」を作成した。介護老人保健施設を利用する被介護者を対象として予備調査を実施した結果、知能や会話能力が維持されていても、社会的認知課題に正答できないケースが多く見受けられた。

第五章 コミュニケーション機能評価表

研究4を高齢者施設で実施するにあたり、社会的認知課題の結果との比較材料が必要となった。日常のコミュニケーション能力との比較に際し、適切な他者評価形式でのコミュニケーション機能評価法が存在しなかったため、評価法自体を検討し、探索的に作成することとした。

第六章 改訂版社会的認知課題の作成

研究3の社会的認知課題を修正・追加し、研究4「改訂版社会的認知課題」を作成した。本章では、各課題の持つ社会的認知機能における意味と、実施方法を検討した。

第七章 改訂版社会的認知課題の実施

研究4「改訂版社会的認知課題」を高齢者施設利用の被介護者に実施した。場面説明課題は知能よりも、場面を大域と局所のどちらを優先するかに影響されやすい傾向がみられ、会話やコミュニケーション機能の評価結果との関係も示唆された。また、理解している部分を抽出する場面理解チェック方式の採用により、被介護者の社会的認知の状態が理解しやすくなることが判明した。

第八章 総合考察

日常会話能力を維持する被介護者の中には、表情や言動を単体での理解能力があっても、場面という状況理解が加わることで、全体の統合理解が困難になるケースが存在し、「空気が読めない」と評価される可能性が考えられる。社会的認知課題は、被介護者の「他者とうまくやっていく能力」の把握を可能にし、被介護者への適切な対応に繋げられることから、介護者・被介護者間のトラブル防止にも有効な手段となり得ることが示唆された。(臨床死生学・老年行動学)